様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月 ２５ 日現在

機関番号：１４３０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2016
課題番号：２５３７０４７４

研究課題名（和文）中国語学用語の調査研究と標準化

研究課題名（英文）Research and Standardization of Chinese Linguistics Terminology

研究代表者
平田　昌司（HIRATA, SHOJI）

京都大学・文学研究科・教授

研究者番号：５０１５０３２１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,700,000円

研究成果の概要（和文）：　1980年代以来、中国語学は、理論的探索、方言のフィールド調査、古典文献の計量分析、漢代以前の多数の写本の発見・解読など、さまざまな方面で大きな発展を遂げた。それにともなって、中国語学分野の学術用語を収集してまとめ、正確な定義を与えることが急務になっている。
　本研究は、日本国内の多数の研究協力者とともに、中国語学において使われる基礎的な専門用語を選び、それぞれについて分かりやすく正確な解説を作成することを企図して、その草稿を作成した。研究の成果は、さらなる改訂を経たのち、『中国語学辞典』として出版の予定である。

研究成果の概要（英文）：Since the 1980's, Chinese linguistics have made great progress in various areas such as theoretical exploration, field research on Chinese dialects, corpus analysis of Classical Chinese materials, and discoveries and decipherment of a lot of pre-Han manuscripts. It is urgent to compile terminology of Chinese linguistics into a lexicon and to give accurate definitions.
This research project, together with many research collaborators in Japan, selected basic terms which commonly used in the field of Chinese linguistics and tried to give clear and accurate definition to them. Results will be published as a "Lexicon of Chinese Linguistics" after further revision.

研究分野：中国語学

キーワード：中国語　中国語学辞典　学術用語

１．研究開始当初の背景

近 40 年のうちに、中国語研究はあらゆる面で大きな進展をみせた。しかし、日本においては、1957-58 年の中国語学研究会編『中国語学事典』、1969 年の中国語学研究会編『中国語学新辞典』以来、40 年以上にわたって中国語学の用語を解説した辞典類が現れていない。また、1980 年の国語学会編『国語学大辞典』、1988-2001 年の亀井孝・河野六郎・千野栄一編著『言語学大辞典』には中国語関連の多くの重要項目が含まれているが、現在の中国語学の水準からみて補うべき点が少なくない。

一方、海外で編まれた各種の中国語学辞典は、日本国内の成果について触れることが少なく、日本の研究者が利用をするには、物足りない水準にとどまる。過去の中国語学の豊富な成果をふまえ、各国の中国語研究論文にみられる用語の収集調査をおこない、日本語での標準的な訳語を与え、学界共通の財産とすることが必要とされている。

２．研究の目的

本研究は、以上のような状況にかんがみて、中国語学の重要な用語を網羅し、日本語・中国語・英語による対照をはかった標準的な用語一覧を作成し、項目ごとに定義、基本的な参考文献を加えて、参照可能な形態でまとめることを目的とした。これにより、以下のような効果が期待される。

(1)中国語学の研究成果を言語学の共有資源化：近 40 年の中国語学において、特に大きな進展を見せ、日本国内の研究者による貢献も少なくない分野としては、特に①現代語文法における理論的・記述的研究、②新出土資料の急激な増加による古文字（特に戦国秦漢時代）・上古中国語音韻研究、③近世中国語(海外対訳資料によるデータを含む)の文法・語彙研究、④方言調査の深化を踏まえた記述的・言語地理学的研究、などを挙げることができる。これら新しい成果を簡明に解説することで、中国語学研究者が研究動向全体を把握し、分野間の連携をすすめることが容易になる。さらに、中国語を専門としない言語学研究者にとっても、中国語学に関する成果の参照を容易にする。

ただし、心理言語学・神経言語学を始めとして、研究代表者が全く関連する知識を持たない分野に関しては、研究対象の範囲からとりあえずはずさざるを得なかった。

(2)中国語学と中国学諸分野の研究融合の促進：中国語学に関する知識は、中国の思想・歴史・文学などに関する学問分野にとっても有用である。しかし、従来は、他の諸分野の研究において、必ずしも中国語学の新しい知見が充分に参照されておらず、結果的に数十年前の不正確な研究にもとづいた論断がなされる場合もあった。本研究の成果を、中国語学と中国思想・中国史・中国文学との研究融合を促進する契機とし、新たな研究手法を作り出すことをめざす。

３．研究の方法

(1)先行する中国語学用語集の収める用語の調査研究：中国語学用語を集成した基礎的文献である日本の『中国語学新辞典』（1969 年)、中国の『語言学名詞 2011』（2011 年）に現れる中国語学用語を整理し、その中から研究上必須だと考えられる項目を選定した。

(2)中国語学文献に現れる用語の調査研究：分野ごとに主幹となる研究協力者の助力を得て、必要と認められる用語・資料名の選定をおこなった。以下、〔〕内に中心的な役割を果たした研究協力者の氏名（敬称略）を記す。

①現代語文法：国際的に大きな影響を与えた朱德熙『語法講義』、劉月華等『実用現代漢語語法』などに現れる重要な用語を抽出し、それぞれについて日本語・英語の訳語案を定めた〔小野秀樹・三宅登之・楊凱栄ほか〕。

②文字学・史的研究：文化大革命後、中国大陸では戦国・秦・漢時代の古文字で書かれた出土資料の発見があいついだ。また、過去には容易に見られなかった各種文献が影印されたこと、各種コーパスの整備が進んで計量的研究が容易になり多くの論文が生み出される等の変化が起きている。重要だとみなされる資料名称や史的研究の用語に関して、研究上で必須となる重要項目の選択をすすめた〔大西克也・木津祐子・竹越孝ほか〕。

③音声学：実験音声学の分野では、標準中国語である普通話のみならず、方言に関してもデータが蓄積された。それらの成果の吸収にも努めた〔朱春躍・岩田礼ほか〕。

④語用論・社会言語学：これらの分野は、40 年前に比して研究の質と量の向上が特に著しいため、新規に項目の選定を行わざるを得なかった。第二言語としての中国語教育に関しても、中国政府が力を入れている現状を反映した項目を選定できるように検討した〔山崎直樹ほか〕。

⑤現代語研究と史的研究の連携：現代語研究と史的研究がともに大きく進展した結果、これら二分野の研究者が会したとき、相互の研究について充分把握できていないこともある。このような現状を打破するため、現代語研究の用語・概念のうち、史的知識を前提とした場合、より効果的研究が可能になる事項の選定を行った〔大西克也・松江崇・竹越孝〕。

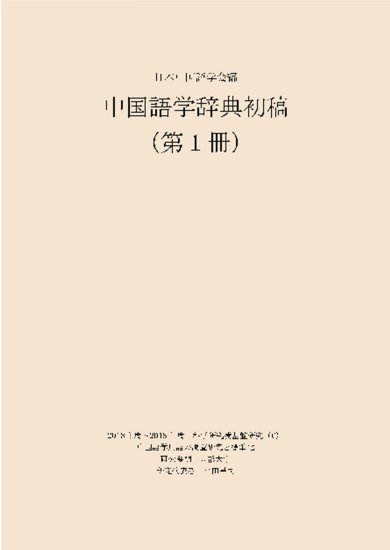
研究代表者である平田昌司は、以上の研究全体を統括するとともに、史的研究分野の作業を分担した。

本研究を推進するにあたっては、本報告書１．で記した背景にかんがみて、中国語学分野における日本の代表的な組織である日本中国語学会の積極的な協力を得ることがで

きた。

４．研究成果

（1）以上のような研究を踏まえて、主要な中国語学用語の一部を五十音順（欧文項目についてはABC順）に排列し、日本語による解説・参考文献を付した『中国語学辞典初稿（第１分冊）』（A4判総393ページ）を2017年3月に少部数印刷し、現段階での中間報告とした。将来的に出版を予定しており現段階で公開するのが適切ではないこと、内容的にもまだブラッシュアップの余地があることに鑑みて、中心的な役割を果たした研究協力者など限られた範囲の専門家のみに参考用として配布し、今後の研究を円滑にすすめるための資料とした。



これにより、日本語・中国語・英語による中国語学用語の対照のための基盤を構築できた。

2017 年度以降も本研究の後継事業を続けており、最終的には『中国語学辞典』として完成・正式出版をめざしている。

（2）その他、中国語学とそれ以外の中国学諸分野との連携に向けて、以下に掲げる副次的成果を公開した。

①中国語の史的変遷と中国の文化制度史の　相関性を論じたもの。時代的には古代から近現代までを通覧しつつ、問題点を指摘した。学会発表(1)(2)、および図書(1)の特に「前言」が該当する。

②19 世紀欧州言語学が 20 世紀中国の国粋派の主張形成に与えた影響を論じたもの。雑誌論文(1)、図書(2)が該当する。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）

(1) HIRATA, Shoji “Let us abandon benevolence, righteousness, ritual propriety, and wisdom: The emergence of the Institute of History and Philology, Academia Sinica”, *Acta Asiatica*, 査読有, 110, pp.99-118.

〔学会発表〕（計２件）

⑴ 平田昌司「語言制度与漢語史」、文史研究院小型学術研討会、2014 年 11 月 24 日、復旦大学、上海（中国）

⑵ 平田昌司「毛居正『六経正誤』与南宋小学」、経学与中国文献文化国際学術研討会、2013 年 8 月 20 日、南京大学、南京（中国）

〔図書〕（計２件）

⑴平田昌司、北京大学出版社、『文化制度和汉语史（文化制度と中国語史）』、2016、325

⑵小南一郎編、汲古書院、『学問のかたち』、2014、pp.307-338 の平田昌司「「仁義礼智」を捨てよう－中央研究院歴史語言研究所の出現」を担当

〔産業財産権〕

○出願状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織

(1)研究代表者
平田昌司（HIRATA, Shoji）
京都大学・文学研究科・教授
研究者番号：５０１５０３２１

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者

(　　)

研究者番号：

(4)研究協力者
相原　まり子（AIHARA, Mariko）
池田　晋（IKEDA, Susumu）
石村　広（ISHIMURA, Hiroshi）
井上　優（INOUE, Masaru）
岩田　礼（IWATA, Ray）
遠藤　光暁（ENDO, Mitsuaki）
大西　克也（ONISHI, Katsuya）
小野　秀樹（ONO, Hideki）
加納　希美（KANO, Nozomi）
木津　祐子（KIZU, Yuko）
佐々木　勲人（SASAKI, Yoshihito）
島津　幸子（SHIMAZU, Sachiko）
朱　春躍（ZHU, Chunyue）
鈴木　慶夏（SUZUKI, Keika）
高久　由美（TAKAKU, Yumi）
高橋　康徳（TAKAHASHI, Yasunori）
竹越　孝（TAKEKOSHI, Takashi）
張　佩茹（ZHANG, Peiru）
戸内　俊介（TONOUCHI, Shunsuke）
千葉　謙悟（CHIBA, Kengo）
野原　将揮（NOHARA, Masaki）
長谷川　賢（HASEGAWA, Ken）
前田　真砂美（MAEDA, Masami）
松江　崇（MATSUE, Takashi）
丸尾　誠（MARUO, Makoto）
三宅　登之（MIYAKE, Takayuki）
宮本　徹（MIYAMOTO, Toru）
森賀　一惠（MORAGA, Kazue）
山崎　直樹（YAMAZAKI, Naoki）
楊　凱栄（YANG, Kairong）
李　佳樑（LI, Jialiang）
渡辺　昭太（WATANABE, Shota）
＊
浅田　雅子（ASADA, Masako）
山本　浩史（YAMAMOTO, Hiroshi）